

日本語教科書におけるローマ字綴りに注目して —明治初期のある3冊について—

A Study on the Roman Alphabet in Three Japanese Textbooks in the Early Years of Meiji-era

福元 美和子、小嶋 栄子

はじめに

ローマ字は世界中に広まっている文字であるが、その綴り方の法則（以下、綴り方）はその言語の数だけ存在すると言われる。ただし、ヘボン式は例外で、世界共通の綴り方として長い間君臨している。沖森（1989）、たなか（1995）によると、日本語がローマ字で書き表されるようになったのは、1549年スペイン人宣教師フランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier：1506年頃-1552）が鹿児島に上陸してからとされている。その後多くのポルトガルの宣教師たちが布教のために来日し、彼らはそのために日本語を学び、ポルトガル語に基づいたローマ字の綴り方を考案した。

小嶋（2001）では、日本におけるローマ字の歴史を「ローマ字がわが国に入ってきた室町時代から江戸末期まで」と「明治維新から現代まで」の2つに分け年表形式で示した。大変簡潔にまとめられているが、当時の社会政治、教育とローマ字との関係がわかる資料である。前半の「ローマ字がわが国に入ってきた室町時代から江戸末期までは、小嶋によると、「外国人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代」とされている。今回、考察対象とする3冊は、出版された時期は明治期であるが著者は江戸末期から明治にある期間日本で生きた2人の外国人と、人生のほとんどを海外で生きた1人の日本人である。「外国人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代」と後半の「日本人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代」の中で、3人の著者はどのようにローマ字を用いたのか。

また、今回対象とした3冊の日本語教科書は多くの先行研究がある。それらは、江戸語・東京語の資料としての文法分析がほとんどである。本稿では、これまでほとんど考察対象とされてこなかった日本語教科書にはたいていの場合書かれる音図と、本文に書かれたローマ字の綴り方に注目し、著者の日本語観や当時の日本の言葉について考察したい。

1. 書籍の概要

本稿では、以下の3冊を考察対象とする。

- ① 『Colloquial Japanese, or , conversational sentences and dialogues in English and Japanese , together with an English-Japanese index to serve as a vocabulary and an introduction on the grammatical structure of the language』 S. R. Brown. 1863 初版
- ② 『An elementary grammar of the Japanese language』 馬場辰猪 1873 初版
- ③ 『An introductory course in Japanese』 Clay MacCauley ,Yokohama 1896 初版

この3冊は、李長波（2010）『日本語教科書選集』の1巻から2巻に掲載されている。編集・解説者である李の調査によって、国語学・日本語学史上で一定の価値を認められてきた日本語教科書を古い年代順に掲載されている。また、②『An elementary grammar of the Japanese language』は、第3版も掲載されているが、今回は、考察対象を全て初版で統一する。併せて、それぞれの書籍の日本語訳名は諸説あるようであるが、今

回は①は小嶋（2001）を、②と③は李（2010）で使用された日本語訳名を使用する。以下に各書について簡潔に紹介する。

『Colloquial Japanese, or , conversational sentences and dialogues in English and Japanese , together with an English-Japanese index to serve as a vocabulary and an introduction on the grammatical structure of the language』（以下、『英和俗語辞典』）は、Brown, Samuel Robbins (1810-1880) によって書かれた。Brown は、幕末から明治初期にかけて日本で活躍した宣教師であり、新約聖書の翻訳にも貢献し、本書以外にも『Prendergast's Mastery system, adapted to the study of Japanese or English』（1875）という日本語の教科書も執筆している。

本稿で扱う『英和俗語辞典』は、幕末明治初期の江戸語、東京語の貴重な資料の一つとして有名である。そう評される一因が、Brown のローマ字綴りによるものであろう。本稿では、既に江戸語・東京語の資料として価値を認められている『英和俗語辞典』を一定の基準として他の2冊の江戸語・東京語資料としての価値を見出す一つの指針としていきたい。

『An elementary grammar of the Japanese language』（以下、『日本文典初歩』）は、馬場辰猪(1850-1888)によって書かれた。日本語学史において、最初に口語文法を解説した書物として山田孝雄の『日本学史要』（『日本語学史』1935：pp298-299）で紹介されて以来、高い評価を得ている。

また、この書を語るにあたって欠かせないこととして、森有礼の「日本語廃止論・英語採用論」との関係である。馬場は、森の主張を序文で批判し、その根拠として本書を作成した。また、福元（2016）で、本文中の日本語と現代日本語と著しく異なる7つ文法を初版と3版で比較した。3版は、初版から約30年の開きがある。また、馬場の死後出版された。本書についての馬場自身の資料は皆無に等しく、馬場の使用した日本語の意図を探るには甚だ未完成であるが、これまでになかった江戸語を引き継ぐ東京語資料としての考察を試みた。

『An introductory course in Japanese』（以下『日本語入門』）は、Clay MacCauley (1843-1925) によって書かれた。MacCauley は、1889年に宣教師として来日し、日本アジア協会会長や、国際記者クラブ副会長、東京ジャーナリスト・クラブ日本平和協会会長を歴任し、1920年に帰国した。本書は、先行研究によって、東京語資料として一定の評価を得ている。

本稿では、これまであまり注目されてこなかった各教科書のローマ字綴りに注目することを目的とし、五十音図や本文に使用されている綴り方を検証することを目的とする。

2. 音図について - 「日本式」か「ヘボン式」か-

言語の教科書には、たいていその言語にある音を最初に音図で表している。本稿で扱う3冊は以下のような音図で表されている。

KATAKANA SYLLABARY.			
SYSTEM OF ROTATION	イ=i.	レ=re	コゴ=ko, ngo.
	ロ=ro.	ソゾ=so, dzo or zo.	エ=ye or e.
	ハババ=ha, ba, pa.	ツヅ=tsz, dz.	テテ=te, de.
	ニ=ni.	子=ne.	ア=a.
	ホボボ=ho, bo, po.	ナ=na.	ササ=sa, za or dza
	ヘベヘ=he, be, pe.	ラ=ra.	キキ=ki, ngi.
	トト=to, do.	ム=mu.	ユ=yu.
	チチ=chi, ji.	ウ=u.	メ=me.
	リ=ri.	井=i.	ミ=mi.
	ヌ=nu.	ノ=no.	シシ=shi, ji.
	ルル=ru.	オ=o.	ヱ=ye or e.
	ワワ=wo or o.	クク=ku, ngu.	ヒビ=hi, bi, pi.
	カカ=ka, nga.	ヤ=ya.	モ=mo.
	ヨ=yō.	マ=ma.	セセ=se, ze.
	タタ=ta, da.	ケケ=ke, nge.	ズズ=sz, dz.
		フフ=fu, bu, pu.	ン=n final, or ng.

127

【図1 『英和俗語辞典』】

<p style="text-align: center;">2 Vowels.</p> <p style="text-align: center;">2. THE VOWELS.</p> <p>Of the above forty-seven, five (ア イ ウ エ オ) are vowels; the sounds of these five letters are as follows:—</p> <p>a ア has the sound of a in master, or mama.</p> <p>i イ " " i in inland.</p> <p>u ウ " " u in queen.</p> <p>e エ " " e in echo.</p> <p>o オ " " o in mouth.</p> <p>The rest of the letters are arranged according to these five vowels, as follows:—</p> <table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>a</td><td>ア</td><td>i</td><td>イ</td><td>u</td><td>ウ</td><td>e</td><td>エ</td><td>o</td><td>オ</td> </tr> <tr> <td>ka</td><td>カ</td><td>ki</td><td>キ</td><td>ku</td><td>ク</td><td>ke</td><td>ケ</td><td>ko</td><td>コ</td> </tr> <tr> <td>sa</td><td>サ</td><td>si</td><td>シ</td><td>su</td><td>ス</td><td>se</td><td>セ</td><td>so</td><td>ソ</td> </tr> <tr> <td>ta</td><td>タ</td><td>ti</td><td>チ</td><td>tu</td><td>ツ</td><td>te</td><td>テ</td><td>to</td><td>ト</td> </tr> <tr> <td>na</td><td>ナ</td><td>ni</td><td>ニ</td><td>nu</td><td>ヌ</td><td>ne</td><td>ネ</td><td>no</td><td>ノ</td> </tr> <tr> <td>ha</td><td>ハ</td><td>hi</td><td>ヒ</td><td>fu</td><td>フ</td><td>he</td><td>ヘ</td><td>ho</td><td>ホ</td> </tr> <tr> <td>ma</td><td>マ</td><td>mi</td><td>ミ</td><td>mu</td><td>ム</td><td>me</td><td>メ</td><td>mo</td><td>モ</td> </tr> <tr> <td>ya</td><td>ヤ</td><td>yi</td><td>イ</td><td>yu</td><td>ユ</td><td>ye</td><td>エ</td><td>yo</td><td>ヨ</td> </tr> <tr> <td>ra</td><td>ラ</td><td>ri</td><td>リ</td><td>ru</td><td>ル</td><td>re</td><td>レ</td><td>ro</td><td>ロ</td> </tr> <tr> <td>wa</td><td>ワ</td><td>wi</td><td>井</td><td>wu</td><td>ウ</td><td>we</td><td>エ</td><td>wo</td><td>オ</td> </tr> </table>	a	ア	i	イ	u	ウ	e	エ	o	オ	ka	カ	ki	キ	ku	ク	ke	ケ	ko	コ	sa	サ	si	シ	su	ス	se	セ	so	ソ	ta	タ	ti	チ	tu	ツ	te	テ	to	ト	na	ナ	ni	ニ	nu	ヌ	ne	ネ	no	ノ	ha	ハ	hi	ヒ	fu	フ	he	ヘ	ho	ホ	ma	マ	mi	ミ	mu	ム	me	メ	mo	モ	ya	ヤ	yi	イ	yu	ユ	ye	エ	yo	ヨ	ra	ラ	ri	リ	ru	ル	re	レ	ro	ロ	wa	ワ	wi	井	wu	ウ	we	エ	wo	オ	<p style="text-align: center;">3 Etymology.</p> <p>When the sign ° or * is marked on the head of a letter, as ガ or パ, it changes its sound; カ (ka) becomes ガ (ga), and ハ (ha), パ (pa). These changes will be seen in the following table:—</p> <table border="0" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td>ga</td><td>ガ</td><td>gi</td><td>ギ</td><td>gu</td><td>グ</td><td>ge</td><td>ゲ</td><td>go</td><td>ゴ</td> </tr> <tr> <td>za</td><td>ザ</td><td>zi</td><td>ジ</td><td>zu</td><td>ズ</td><td>ze</td><td>ゼ</td><td>zo</td><td>ゾ</td> </tr> <tr> <td>da</td><td>ダ</td><td>di</td><td>ヂ</td><td>du</td><td>ヅ</td><td>de</td><td>デ</td><td>do</td><td>ド</td> </tr> <tr> <td>ba</td><td>バ</td><td>bi</td><td>ビ</td><td>bu</td><td>ブ</td><td>be</td><td>ベ</td><td>bo</td><td>ボ</td> </tr> <tr> <td>pa</td><td>パ</td><td>pi</td><td>ピ</td><td>pu</td><td>プ</td><td>pe</td><td>ペ</td><td>po</td><td>ポ</td> </tr> </table> <p>ア and エ, イ and 井, オ and ヲ, are distinguished by ancient usage, but at the present time the distinction is no longer observed.</p> <p>In most parts of Japan, チ di and シ zi, ツ du and ズ zu, are distinguished from one another in their pronunciation, although they are pronounced alike in some parts of the country.</p> <p style="text-align: center;">II. THE PARTS OF SPEECH.</p> <p>Words are divided into eight classes, that is, parts of speech—Nouns, Adjectives, Pronouns, Verbs, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.</p> <p><i>Note</i>—There is nothing in Japanese to answer to the English Articles, definite or indefinite.</p>	ga	ガ	gi	ギ	gu	グ	ge	ゲ	go	ゴ	za	ザ	zi	ジ	zu	ズ	ze	ゼ	zo	ゾ	da	ダ	di	ヂ	du	ヅ	de	デ	do	ド	ba	バ	bi	ビ	bu	ブ	be	ベ	bo	ボ	pa	パ	pi	ピ	pu	プ	pe	ペ	po	ポ
a	ア	i	イ	u	ウ	e	エ	o	オ																																																																																																																																														
ka	カ	ki	キ	ku	ク	ke	ケ	ko	コ																																																																																																																																														
sa	サ	si	シ	su	ス	se	セ	so	ソ																																																																																																																																														
ta	タ	ti	チ	tu	ツ	te	テ	to	ト																																																																																																																																														
na	ナ	ni	ニ	nu	ヌ	ne	ネ	no	ノ																																																																																																																																														
ha	ハ	hi	ヒ	fu	フ	he	ヘ	ho	ホ																																																																																																																																														
ma	マ	mi	ミ	mu	ム	me	メ	mo	モ																																																																																																																																														
ya	ヤ	yi	イ	yu	ユ	ye	エ	yo	ヨ																																																																																																																																														
ra	ラ	ri	リ	ru	ル	re	レ	ro	ロ																																																																																																																																														
wa	ワ	wi	井	wu	ウ	we	エ	wo	オ																																																																																																																																														
ga	ガ	gi	ギ	gu	グ	ge	ゲ	go	ゴ																																																																																																																																														
za	ザ	zi	ジ	zu	ズ	ze	ゼ	zo	ゾ																																																																																																																																														
da	ダ	di	ヂ	du	ヅ	de	デ	do	ド																																																																																																																																														
ba	バ	bi	ビ	bu	ブ	be	ベ	bo	ボ																																																																																																																																														
pa	パ	pi	ピ	pu	プ	pe	ペ	po	ポ																																																																																																																																														

【図2 『日本文典初歩』】

24 THE KATAKANA SYLLABARY.

	A	I	U	E	O	
	ア _a	イ _i	ウ _u	エ _e	オ _o	
K	カ _{ka}	キ _{ki}	ク _{ku}	ケ _{ke}	コ _{ko}	
G	ガ _{ga}	ギ _{gi}	グ _{gu}	ゲ _{ge}	ゴ _{go}	
S	サ _{sa}	シ _{shi}	ス _{su}	セ _{se}	ソ _{so}	
Z	ザ _{za}	ジ _{ji}	ズ _{zu}	ゼ _{ze}	ゾ _{zo}	
T	タ _{ta}	チ _{chi}	ツ _{tsu}	テ _{te}	ト _{to}	
D	ダ _{da}	ヂ _{dji}	ヅ _{dsu}	デ _{de}	ド _{do}	
N	ナ _{na}	ニ _{ni}	ヌ _{nu}	ネ _{ne}	ノ _{no}	ン _n
H	ハ _{ha}	ヒ _{hi}	フ _{fu}	ヘ _{he}	ホ _{ho}	
B	バ _{ba}	ビ _{bi}	ブ _{bu}	ベ _{be}	ボ _{bo}	
P	パ _{pa}	ピ _{pi}	プ _{pu}	ペ _{pe}	ポ _{po}	
M	マ _{ma}	ミ _{mi}	ム _{mu}	メ _{me}	モ _{mo}	
Y	ヤ _{ya}	イ _{(y)i}	ユ _{yu}	エ _{(y)e}	ヨ _{yo}	
R	ラ _{ra}	リ _{ri}	ル _{ru}	レ _{re}	ロ _{ro}	
W	ワ _{wa}	ヰ _{(w)i}	ヱ _{(w)u}	ヰ _{(w)e}	ヲ _{wo}	

【図3『日本語入門』】

3つの音図を比較すると、図2の『日本文典初歩』は現代で言うところの「日本式」それ以外の2つは、「ヘボン式」を使用していることがわかる。

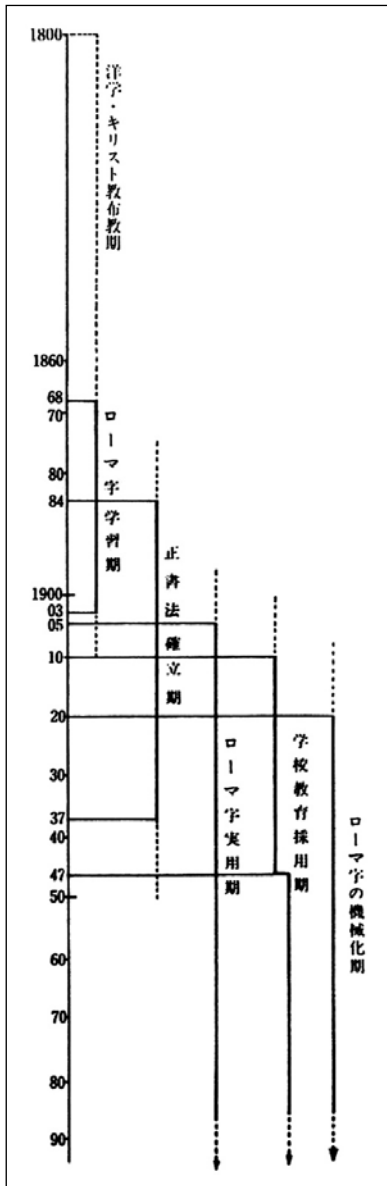
また、『英和俗語辞典』は「いろは歌」、『日本文典初歩』と『日本語入門』は「五十音図」が掲載されている。築島（1964）、中森（1989）によれば、「いろは歌」は、『金光明最勝王経音義』（1079年）に最初に掲載されたとされていることから、11世紀後半頃の成立ではないかとされている。「五十音図」は、最古に現れたものとして『孔雀経音義』（1004-1028年頃）だとされているが、いくどか形が変わり、現在のあいうえお順は12世紀ごろに現在の形が出来上がり、現在のあかさたなはまやらわ行順に完成するのは17世紀以降とされている。考察対象の3冊は、全て19世紀に執筆、出版された本であるが、当時もどちらの音図も日常的に活用されていたことがわかる。

つぎに、各書が出版された時期が、日本におけるローマ字史のどの位置にあるかを考察したい。

【図1『英和俗語辞典』】が出版された1863年ごろは、小嶋（2001）によると、まさに「外国人が日本語を書き表すためにローマ字を用いた時代」の終盤で、『英和俗語辞典』が出版される4年前の1859年にアメリカの眼科医ヘボン J. Hepburn（1815-1911）が宣教師兼眼科医として来日している。そして、その3年後には前島

密が『漢字御廃止之義』を将軍徳川慶喜に建議した。少しずつ、日本社会の中でもローマ字が浸透し、ローマ字運動が起こり始める時期である。

また、日本におけるローマ字の流れを「洋楽・キリスト教布教期」、「ローマ字学習期」、「正書法確立期」、「ローマ字実用期」、「学校教育採用期」、「ローマ字の機械化期」の5期に分けた橋田（1992）によると、『日本俗語典』が出版された時期は、「洋学・キリスト教布教期（1800-1868）」と言われる時期の末期にあたる。前節で、『日本俗語典』には「ヘボン式」が使用されていると述べたが、実際は、小嶋（2001）によると、「ヘボンが、1863年にS.R. ブラウンが著した『英和俗語辞典』のつづり方に準拠して、和英辞典『和英語林集成』（初版）を上海で出版した。」。つまり、「ヘボン式」の土台はBrownによるものだということがわかる。



【図4『日本のローマ字運動』】

以上のようなことから、馬場のローマ字観は現時点では不明な部分が多いが、馬場が何らかの意図があって「日本式」を採用したことが推測できる。

【図3『日本語入門』】1896年ごろは、小嶋（2001）によれば、日清戦争が終わったところである。橋田（1992）によれば、「ローマ字学習期（1868-1903）」後期と「正書法確立期（1884-1937）」前期が重なりながら進んでいる時期である。この時期になると、文明発達のためには、ローマ字は必要不可欠との意識が高まり、先にも示

【図2『日本文典初歩』】が出版された1873年ごろは、小嶋（2001）によれば、前年の1872年に南部義籌が、文部省にローマ字採用に関する建白書を提出。さらに同年の1月にロンドンでサンマース（Summers James : 1828-1891）が「日本式前期」のローマ字のつづり方で日本語の五十音を示した。ロンドンに居ながら、「日本式」五十音図を掲載したのは、サンマースの影響もあるのではないだろうか。馬場自身がローマ字綴りについて述べた資料は今のところ発見されていない。

また、橋田（1992）によると、「ローマ字学習期」と言われる時期の初期である。この時期は

文明開化期、西洋文化輸入期といったらもっと実際的な表現かもしれない。とにかく日本人は漢字やかな以外にローマ字があるということを知ったのである。しかもそれが西洋からの文明や機械や宗教をもってきた。外国語はみなローマ字で書いてある。日本人にしてみれば外国語を理解するにはローマ字が読めたり書けたりできるようになることが最も必要とされたのである。

（『日本のローマ字運動』 p118）

歴史的にみると、ローマ字が日本社会に急速に浸透し始めた時期に『日本文典初歩』はロンドンで出版された。著者である馬場自身によって、なぜ「日本式」で五十音図を表すことにしたかの理由を語ったメモや原稿は残されていない。馬場の足跡を辿ってみると、留学前にも英語を勉強していたこと、英国留学中に執筆したことなどから、ヘボンの『和英語林辞典』を知らないとは考えにくい。『日本文典初歩』は、英語母語話者向けの日本語教科書であることから、通常であれば「ヘボン式」を採用しそうなものである。

繰り返しになるが、馬場自身によって『日本文典初歩』の解説はなく、筆者が知る限りにおいて、執筆過程の中で、構想メモなどは発見されていない。また、本文中に出てくる馬場のローマ字綴りは、「日本式」と「ヘボン式」

した南部義壽、前島密、西周といった有識者や政治家らによって、ローマ字を国字にと訴える動きが本格的に出始める。また、1885年には羅馬字会が発足し、ローマ字が社会に浸透していくにつれ、「日本式」と「ヘボン式」が対立するようになる。MacCauleyは、『日本語入門』を3部構成し、2部までは、日本語を綴る際にローマ字とかな文字の両方を使用しているが3部の会話編に関してはかな文字のみを使用している。ローマ字や母国語を間に挟まない点は、現代市販されている会話重視の教科書と通じるところである。

3. 各書のローマ字綴り -江戸語・東京語資料として-

3.1 ローマ字で綴ることの意義

ローマ字で綴ることの利点は、第一に音声を表せることである。ローマ字を読むことができれば、その言葉を知らなかったとしても、正しい音で発音ができる。そして、もう一つの利点として、「分かち書き」されることで、書き手の文法観がわかる。この点は、かな表記で文を綴る場合も同じである。

3.2 各書のローマ字表記

これまでの先行研究では、本文で使われている江戸語・東京語資料としての考察や、使用文法についての考察に重点がおかれてきた。これらの研究によって、各書の書物としての一定の価値が見出された。しかし、著者が表記したローマ字の綴り方についての言及はあまりされてこなかった。本章では、各著者の綴り方で特徴的な個所を抜き出し考察を試みたい。

3.2-1 鼻濁音の綴り方

松村(1977)によると、

江戸語の音韻上の特徴ともいべき点としてよくあげられるのは、次のような事項である。(1)「クウ」「グウ」を「カ」「ガ」に発音する。たとえば「クウ(火事)」「グウ」を「カジ」、「グワイコク(外国)」を「ガイコク」と発音する。(2)語中のガ行音を鼻濁音に発音する。たとえば「メガネ(眼鏡)を【me^hane】、「カゴ(籠)」を【ka^hgo】と発音する。(3)「アイ」という連母音を「エー」と発音する。たとえば、「知らない」を「シラネー」のようにいう。(4)「ヒ」を「シ」と混同する。たとえば「ヒバチ(火鉢)」を「シバチ」、「ヒノキ(檜)」を「シノキ」と発音する。(5)「シュ」を「シ」と発音する。【松村明『近代の国語-江戸から現代へ-』pp168-169】

という特徴がある。

これらの中でも、特に(2)については、ローマ字表記することで明確に発音方法を伝えることができる。また、著者の音韻意識の高さも明確になる個所である。各書での表記は以下に表す通りである。

①『英和俗語辞典』について

著者であるBrownは、鼻濁音を徹底的に表記している。Brownは、1859年から1879年の間日本に滞在している。実際に話されている日本語の音から鼻濁音を聞き取って表記したものだと言える。以下に列記する。ただし、ガ音(nga)は、多数であったため、一部抜粋とする。

(ガ)

- ・Kita no hoo ni kuro ugumo nga atszmatte orimas'.
- ・Yedo no hoo wa ima ame nga f' tte orimas' ka to omoimas'.
- ・Washi wa ushi no shingai wo Kano-zan e motte ittaroo.
- ・O hanashi mooshitai koto nga aru.
- ・Mihon nga mitai.

- ・ Wa-ta-k' shi no ku-tsz wo mi-nga-ke.
- ・ A-no o h' to wa yo-mu ko-to nga de-ki-ma-s' -ka?
- ・ A-no h' to wa yo mu ko-to nga de-ki-ru ka?
- ・ Ko-re wa do-o sh' -te ko-shi-ra-e-ta ka, ka-n-nga-i-te shi-re-ru ka?
- ・ Ko-no te-nga-mi wo - sa-ma e mo-t-te o i-de na-sa-re-te-ku-da-su-re.
- ・ A-re nga i-u ko-to ni ka-ma-u-na.

(ギ)

- ・ A-na-ta wa I-nga-ri-sz no ko-to-ba wo o ts' -ka-e na-sa-re-ma-s' ka?
- ・ A-na-ta ko-re ma-de no ki-n nga-n no de nga ch' -ome-n ni hi-ka-e-te go za-ri-ma-s' ka?

(グ)

- ・ Ku-r' ma wo ka-do-ngu-chi ni mo-do-se.

(ゲ)

- ・ Mi-na k' te, to-mo ni o-shi a-nge-ro.
- ・ Ko-nge-nu yo-o ni o ka-ki ma-wa-shi na-sa-ru.
- ・ Sa-m bu ni a-no o ka-ta ni o a-nge na-sa-re.

(ゴ)

- ・ So-no ka-ngo no ta-ma-ngo wo ka-dzo-e-te mi-ro.
- ・ So-no e-dz wo yo-ngo-shi na-sa-ru-na.
- ・ Ka-ra-da-wo u-ngo-ka-sz wa mi no k' sz-ri ni na-ru.

② 『日本文典初歩』 について

本書において鼻濁音についての説明や表記はみられなかった。

例えば、

- ・ Watakusi ga sono shomotu wo motteimasu ka.
- ・ Anatagata wa sono shomotu wo motteimasu.
- ・ Watakusi wa tegami wo uketorimasita.
- ・ Watakusi wa sakuzitu Kanagawa ye ikimasita.
- ・ Kono ki wa sore yorimo okiwu gozarimasu.

などの綴り方であった。

③ 『日本語入門』 について

本書では、鼻濁音、いわゆるガ行音について、

The sound heard in the English g hard, spoken in such words as garb, good, gate, and go, is rendered in Japanese by the K series of syllables, written with the addition to the right of the syllables of the mark (、) called the nigori, or sign of impurity is sound.

(中略)

This rule is without exception when these syllables begin words. Also, in some parts of Japan, these syllables represent the hard g sound wherever placed.

It should be noticed here, however, that in Central Japan, especially in Tokyo, when these syllables do not stand at the beginnings of words, their consonantal element becomed like ng in the word singer.

a. Thus カゴ is read in Tokyo not ka-go but kango-o: - observe, the reading is not kan-go but kang-o, or ka-ngo.

【李 長波『近代日本語教科書選集 第2巻』2010p27】

と述べ、ガ行音は鼻濁音で発音するよう表記している。

また、本書は他の2冊と異なり、巻頭の General introduction と、第2部の Elements of Grammar は、ローマ字表記もあるが、第3部の Practice in the colloquial 以降は、ひらがなでの分かち書きをしていることも特徴的である。

本文中に表記された日本語文のローマ字綴りでは、鼻濁音を【nga】と表記したものはなかった。

例えば、Dare ga ame, tsuchi, hi, tsuki, misu, kaze, hi wo otsukuri, nasaremashita ka.

第3部のひらがなの分かち書きは、

イーエほんたうのびやうきではありませんが、さくばんさけをのみーすぎ
ましたので、けふはやくにたんのです。めしつかひにはよいもの
ですが、ときぐのんだくれてこまります。

といった表記である。

以上のことから、著者である MacCauley は、はっきりと鼻濁音を区別し、それが東京地域のみであることも知っていたのである。

本節では、江戸語・東京語の特徴の一つである鼻濁音を各著者の表記方法を考察してきた。『日本俗語典』や『日本語入門』に関しては、先行研究によって、江戸語・東京語資料としての一定の評価を得ているが、今回の調査と考察で、評価をさらに強めることができたと考える。一方で『日本文典初歩』については、未開拓の部分が多い書物である。本節の考察では、著者である馬場が、鼻濁音を把握していたのか明確にはできなかった。しかし、イギリスへ留学する前は江戸で福沢諭吉の下で英語を勉強していた。土佐で生まれ、長崎から江戸へと移動しそれぞれのお国言葉の違いに気づけなかったはずはない。そもそも言語学者ではない馬場が音声表記にまで至らなかったのか。未開拓な部分が多い『日本文典初歩』について今後も考察を継続したい。

3. 2-2 分かち書きの方法について

同一字種の文字(かな、またはローマ字等)で文章を書く際に、語句にまとまりを与え、読みやすくするために、文をくぎって離し書きにすることを「分かち書き」という(『日本語文法大辞典』村松明、明治書院、1971)。日本語では漢字仮名交じり文を用いて、漢字が意味のまとまりを表して分かち書きの役目も果たしているため、ほとんど分かち書きを意識することはない。

けれども、ローマ字のような表音文字を用いる表記は、意味のまとまりをあたえるためにどうしても分かち書きが必要になる。この時、「どのように分かち書きをするか」ということは「どのように文の区切りを意識するか」ということへとつながり、それが「単語」というものを意識させることへとつながっていく。すなわち、分かち書きの様子を見れば、その書き手がどのように単語を意識しているかがわかると言えるのである。

ここで、①『日本語俗語辞典』、②『日本文典初歩』、③『日本語入門』の3冊を見てみると、3者ともくつつきの「ガ」を、下記のように名詞から離して書いている。

① Mihon nga mitai.

② Watakusi gas ano shomotu wo motteimasu ka.

③ どうか あなた が わが くに の ことば を じいう に おつかひ なさる やう (一部抜粋)

通常の口語として書き表すならば、「くつつき」は名詞にくっついて発音されるので、

① Mihonnga mitai.

② Watakusigas ano shomotu wo motteimasu ka.

③どうか あなたが わが くに の ことば を じいう に おつかひ なさる やう (一部抜粋) と書き表すのではないだろうか。

しかし、これらの3冊を書いた著者たちは、名詞とくつつき(助詞)を離して記述している。このことは、日本語の名詞にはほとんどの場合名詞にくつつき(助詞)を付けて他の単語との関係を表すということを、日本語を学ぶ学習者に示したかったのではないかと思われる。つまり、田近(2002)にあるように、「『ぼく』『東京』『横浜』『行く』などの用言・体言だけでは、文が成り立たない。いろいろな助詞がついて、語と語との関係が明らかになり、細かい微妙な意味もそえられて、それぞれまとまった意味を持つ文になる」ことに気づいていたと思われる。現在でこそ日本語のテキストでは当たり前のことであるが、まだ日本の言葉として共通語が確立されていない150年以上も前に同じことに気づいていたことになる。著者たちの日本語教育に対する功績の一つと考えても良いのではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、対象とする3冊の先行研究で考察されることがなかった、極めて狭い範囲であるがローマ字綴りについて考察してきた。これまでの先行研究が考察してきたように「江戸語・東京語としての資料」としての価値を強化するとともに、著者たちが置かれた環境や時代はそれぞれ違ったが、口語日本語文法に向き合い、テキストとして書き表した方法は3人とも同じだったということがわかった。それぞれのテキストには、ローマ字綴りについてもまだまだ考察するべき点が残されている。それらについて、さらに調査を続け、研究を深めていきたい。

参考文献

沖森卓也編(1989)『日本語史』おうふう

橋田広国編著(1992)『日本のローマ字運動 1582～1990』日本ローマ字教育研究会

小嶋栄子(2001)「日本におけるローマ字の歴史」『研究会報告 第22号』日本語文法研究会

高橋太郎・本間繁輝・古藤洋太郎・依田逸夫『ちからを伸ばす入門期の国語教室』日本書籍

スリーエーネットワーク『みんなの日本語 初級I 本冊ローマ字版』スリーエーネットワーク

田近洵一(2002)『シグマベストくわしい国文法 中学校1～3年』文英堂

築島裕(1964)『国語学』東京大学出版

馬場辰猪(1987)『馬場辰猪全集 第一巻』岩波書店

福元美和子(2016)「明治初期の東京語資料としてみる“An Elementary Grammar of the Japanese Language”」『対照言語学研究 第25号』

村松明(1971)『日本語文法大辞典』明治書院

村松明(1977)『近代の国語－江戸から近代へ』桜楓社

三尾砂(2003)『三尾砂著作集I』ひつじ書房

李長波(2010)『近代日本語教科書選集 第1巻』クロスカルチャー

李長波(2010)『近代日本語教科書選集 第2巻』クロスカルチャー

李長波(2010)『近代日本語教科書選集 第10巻』クロスカルチャー

山田孝雄(1935)『国語学史要』岩波全書